The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	朱陸王三子の異同に就きて
Author(s)	秋月, 胤継
Citation	懐徳. 1938, 16, p. 1-16
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/88997
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

懷德　第十六號

朱陸王三子の異同に就きて

秋月胤繼

一

儒教は古代と近代とで頗る其の面目を異にしてをります。一體儒教は實行を主として立つた教でありまして理論は其の力むる所ではありませぬ。そして其の本領とする所は己を修めて人を治むるといふことであります。支那の正史は堯舜から始まりますが堯舜以來歷代の代表的帝王は何れも道德政治合致の上に立つて儒教の本領である修己治人の道を實行したのであります。先づ帝堯が自己の明德を明にして之を九族に及ぼし更に進んで百姓昭明萬邦協和の實を擧げたる事は尙書堯典に明に見えてをります。そして其の道は堯から舜、舜から禹、禹から湯、湯から文、武、周公と順次に傳はりまして此等歷代の代表的帝王は何れも帝堯の遺範に則つて天下を治め周代に至つて古代文化の最盛期に達し

たのであります。

さて道の傳統の上より見ますと周公の後を承け繼ぎました者は孔子であります。さりながら孔子は春秋の亂世に出られ且臣下の身分に生れられましたので周公以前の群聖人が帝王の位に在つて親しく天下を治むるといふ利便を以てはをられませず、又不幸にして當時孔子を用ゐて其の國政を行はしむる賢諸侯もなく孔子の一生は誠に不遇でありました。然し孔子はかゝる時世に在つても堯舜以來傳來せる儒教の本領を維持し、己を修めて人を治むることに專ら力を致し終始一貫變る所が無かつたのであります。卽ち徹頭徹尾實行を主として立たれたのであります。が晩年に至り道を以て天下を救はんとする望を達することが出來ないことになられましたので六十八歲の時已むを得ず退いて鄉國魯に歸り他に殘されたる事業卽ち一には門人を敎育して道を後世に傳ふること一には經典を編纂することによつて道を後世に傳ふることに餘力を傾注され後者の業績が六經となつて現はれたのであります。然し其は全く已むを得ざるに出でられたのでありまして孔子の精神は終生實行を主として立つことに在つたのであります。從つて此の實行を主とせる儒敎は孔子を以て最後としてをります。孔子以後の儒敎は其の當時の思想界の情勢よりして獨り實行のみを主としては立てぬこととなり此に理論的方面からも儒敎の敎理を闡明することになりました。此の理論的方面から儒敎を闡明する魁を爲した者は孔子の孫に當られまする孔伋字子思であり續いでは孟子であります。此の二子の力によつて儒敎に理論

的基礎が置かるることになつたのであります。

一體儒教といふ教は其の實行的なると理論的なるとを問はず吾が心の明德を明にして之を吾が身に實現することを期するものであります。更に端的にいひますと儒教は心を治むることを本とする學問であります。でありますから前に列擧しました歷代の代表的帝王は何れも先づ其の身の明德を明にするを第一義とし然後之を天下を治むる上に及ぼしてをります。孔子が儒教思想を大成して之を後世に傳ふるに及び求仁を說いて爲學の目的とし之を達成する功夫として博文約禮を說き克己復禮を說かれました。孔子が博文約禮と克己復禮とを說かれたるは此の功夫によつて仁卽ち本心の德を求めしめん爲でありまして是れ卽ち心を治むるを本とする學であります。子思孟子に至りましては世道陵夷し異端邪說紛興して人心を惑亂するに至りましたので是等の異端邪說を廓淸して世道人心を維持することが極めて必要となりました所から益力を儒教の理論的說明に用ふることとなりました。卽ち子思は中庸二篇を著はし性道教の原理を說いて人の德人の道が天の德天の道に淵源せるを明にし更に天道人道を推本して誠の一字に歸約し儒教の根本義を示しましたが特に尊德性を以て爲學の目的とし道問學を以て之が功夫とし學者をして力を用ふる所を知らしめました。此の尊德性と道問學とは近世儒教に大なる影響を及ぼすことになつたのでありまして本題の朱陸王三子の異同は全く此に胚胎してをるのであります。孟子は書七篇を著はし仁義を說き四端を說き理氣心性に關する說明を爲して儒教の敎理を

闡明しましたが特に存心養性を說き先立乎其大者を說いて爲學の目的とし知言養氣を說き强恕而行を說いて之が功夫を示し學者をして其の據る所を知らしめました。凡そ人の禽獸と異なる所は靈妙なる心的作用を有して萬物の靈長たる地位を占むる所に在ります。されば人たる者は其の本心を存養するを以て尤も重要なる務とします。孟子は學問之道無他。求其放心而已矣。といつて此點に就き反覆懇說してをります。斯くて子思孟子の敎ふる所は是亦心を治むるを本とする學であります。然も此の本心を宗とする學は孟子以後不幸にして中絕し秦漢魏六朝隋唐を通して永く傳らず。此間僅に隋の王通、唐の韓愈によつて一時墜緖を繼承せられた觀がありましたが是亦永續しませんで中世を通じて所謂訓詁學の流行を見たのであります。然るに此の本心を宗とする學は宋代に至つて頓に復活され且宋學の名の下に特殊なる發展を遂ぐることとなりました。而して宋代に輩出しました幾多の學者は何れも思孟二子の風を聞いて起れるものでありまして、思孟二子の學風の後世に及ぼせる影響は實に遠く且大なるものがあります。

二

斯くて宋代儒敎界を通じての學風の一般的特徵は大多數の學者が子思孟子の學風を受けて理氣心性を說くことによつて儒敎の根本原理を明にし更に本心の德を明にして之を吾身に實現するを以て學問の本義とせる點に在ります。當時の代表的學者たる周濂溪、程明道、程伊川、張橫渠、朱子、陸象山

等何れも然らざるなしであります。そは此等諸儒の著述言議に徵して明であります。然るに南宋時代に於て爲學の功夫に重きを置き格致主義を以て立つものと爲學の目的に重きを置き唯心主義を以て立つものとの二學派を生じ二者相對立して永く後世に傳はりました。爲學の功夫とは中庸に所謂道問學といふことであり爲學の目的とは中庸に所謂尊德性といふことであります。前者の代表者は朱子であり後者の代表者は陸象山であります。然も此の兩學風の相違は全く學問上に於て學問の目的を主として立つか學問の功夫を主として立つか目的と功夫其の何れに主力を置くべきかに關し其の意見を異にするに起因せるものでありまして、其の歸着する所に至つては何れも吾が本心の德を明にして之を吾が身に實現するに在つて全く相同じであります。されば之を朱子に就いていへば朱子は本心の德を明にして之を吾が身に實現するを以て爲學の眞的とせるも問學の功によつて物事の道理を究明し心知を開發するにあらざれば其の目的を達することは出來ませぬ。之を大學の言葉に因つて示しますと格物致知の功に因らなければ誠意正心修身に達することは出來ませぬ。本心の德を明にして之を吾が身に實現するは究竟の目的でありますが此の目的を達する爲には必ずや問學の功によつて其の知を究めなければならぬとして其の主力を問學の上に置きました。是れ道理ある主張であります。されば朱子は決して問學にのみ心を用ゐて本心を閑却したのではなく問學に道るは本心の明に達する爲の過程でありまして問學に道らずしては其の本心の明に達することは出來ぬとして其處に其の主張を置かれたの

でありまず。朱子の學風が穩健着實であつて聊も躐等の風なく一般學者の爲に謀ること至つて深切なりとせらるるは固より其の處であります。只朱子の學風の弊處は其の流を酌む學者が朱子の眞意を察せず偏に問學にのみ沒頭して其の本來の目的たる本心を尊ぶことを閑却するに在ります。さうなつては勿論よくありませぬ。然し之を以て陸象山のやうに全面的に朱子の學問を支離なりとして之を斥くるは其の當を得たりとはいへませぬ。

更に陸象山に就いていへば象山の力を用ゐたる所は德性を尊ぶ處に在ります。象山が孟子に私淑せることは常に自ら標榜せる所であります。そしてよく先立乎其大者といふ孟子の言を引用してをります。それで或人が象山の主張中より孟子の先立乎其大者の一句を去れば何物も殘らずといへるに對し象山は然りと答へてをります程に此の言葉を重んじてをりました。象山は孟子の此の語を借りて人たる者は必ず本心を有つてをる。此の本心を確立して常に此の本心の命ずる所に從つて行動すると其の行ふ所は自ら道に合致するを說き示したものであります。然し眞に此の本心を保持し本心の命ずる所に從つて行動するは資質聰明の人ならでは可能でありませぬ。一般の人に在りては其の本心とする所のものは眞の本心ではなくて多くは人心であります。若し偏に人心の動く所に從つてやつたならば過罪に陷らざるものは少いと申してよいのであります。されば一般の人に在りては必ず講學の功によつて先づ其の本心を明にせねばなりませぬ。是れ講學の必要ある所以であります。象山に於ても講學の

必要を認めないのではなく頗る熱心に之を說いてをります。然し餘りに本心を重んずるに急であつて自ら講學を輕んずる傾向なきにはあらず。そこに其の弊處があります。從つて其の學問の流れを酌むものは其の學風の弊處のみを受けて、全然講學を廢して人心の動きにまかせて行動せんとするに至りました。此處に象山の學風に缺陷があります。然し象山自身は決して講學を不必要としたのではなく寧ろ大に其の必要を認めて之を力說してをります。されば朱子が象山の學を非難して直に頓悟なりとしてをりますのは象山の學問の偏處のみを受けた學者に對して之をいへば當つてをりますが象山其の人について之を見ますと少しく過當なりといふべきであります。

要するに朱子の學と陸象山の學とは其の學風の上に自ら一方に偏ずべき素因を有つてをるのでありまして流石朱陸二子に在つては其の弊を認めませんが其の學流の間には著しく之を認めらるるに至りましたもので是は自然の結果であります。只其の結果より見て直に朱子學は支離なり陸學は頓悟なりと斷ずるのは正當なりとはいはれませぬ。

三

斯く朱陸二子の學問は其の極致に於ては合致するのでありますが其の過程に於て其の力を用ふる所を異にせる所から兩學派の對立抗爭を惹起したのでありまして此の抗爭は宋一代に止まらず延いて明代にも及び朱陸の爭は遂に一轉して朱王の爭となりました。陽明王氏は其の唯心主義を執れる點に於

て陸象山と全く其の主張を同じくせる所から深く象山に私淑する所がありまして極力象山の主張を支持して朱學と抗爭しました。王陽明の考では聖人の學は心學である。心學は源を遠く堯舜禹の授受に發し孔子を經て孟子に至りましたが爾來久しく中絶して傳らず。宋代に至り周程二子其の墜緒を繼承しましたが庶幾しといふだけのことで十分でない。眞に能く孟子の傳に接續したものは陸象山であるとし象山之學。易簡直截。孟子之後一人。斷非餘子所及也。とまで極言してをります。そして陽明自身は遙に象山の系統を繼ぎ唯心主義を標榜して立ち從來朱學の執り來れる講學の道には由らず簡捷なる一新生面を開きました。今朱王二子の學問の異同を案じまするに其の分岐點と目せらるるものに四つあります。格物致知に關する見解を異にせること其の一であり、心と理とに關する見解を異にせること其の二であり、學問上其の主力を置く所を異にせること其の三であり、知行の關係につき其の見解を異にせること其の四であります。以下逐次之を說明してゆきますが之を說明してゆきますと獨り朱王二子の異同を見ることが出來るのみでなく陸王二子に於ても其の根本主張に於ては同一でありますが其の他の點に於ては必ずしも同一でないことを知ることが出來ます。

先づ格物致知につきましては朱子は物を物事の道理を解し格を至ると訓し格物とは物事に具はりたる道理を窮め盡くして其の道理の至極に至ると解します。又致知の知を知識の意味に解し致を推し極むると解し乃ち致知とは吾が心の知識を推し極むる意味であるとし從つて格物致知とは物事の道理を

窮め盡くして吾が心の知識を十分推し究めいかなる道理をも知らざる所なく通ぜざる所がないやうにする義と解するのであります。此の解釋は程伊川之を始め朱子之を承けたのでありますが獨り朱子のみならず陸象山に於ても同じく此の解釋を執つてをります。然るに王陽明は之を執らず。朱子が格物致知を然く解するは是れ理を事物に求めんとするもので告子義外の說となつてよろしくない。であるから知を良知と訓し格を正と訓し吾が心の不正を正して吾が心の良知を事事物物に致すと解すべきであると主張してをります。告子義外の說とは告子は孟子と同時代の學者でありまして其の主張の中に仁內也義外也といふことがあります。卽ち仁は心の內に在るも義は心の外に在りと見るのであります。此の告子の義外說の誤つてをることは孟子が明に之を是正しまして委細は孟子の告子上篇に見えてをります。朱子は全面的に孟子に私淑し孟子を尊崇表章してをる學者でありますが其の朱子が孟子の極力排斥して其の誤れるを正した告子義外の說と同じ說を立てたと考ふることは出來ることでありませうか。そんなことは到底考へられませぬ。朱子は萬物の理は皆吾が心に具つてをるが聰明な人ならでは學ばずしては其の理を知ることは出來ない。因つて格物窮理の功夫によつて吾が心の知識を開發して其の理に通ずるやうにすべきであると說いてをるのでありまして決して告子の如く義外の說をしてをるのではありませぬ。例へば父子といふ物があると其處に慈孝といふ理があり、君臣といふ物があると其處に禮忠といふ理がある。父は子に對して慈であるべきであり、子は父に對して孝であるべき

である。君は臣を使ふに禮を以てすべきであり、臣は君に事ふるに忠を以てすべきである。斯くて君臣父子の心には自ら禮忠慈孝の理が具つてをるのである。されど之を一般の臣子が君父に事ふる上でいふと先づいかに忠と孝とを盡くすべきかにつき其の理を明にせずしては十分其の理を盡くすことは出來ぬ。そこで先づ其の忠孝の理を窮めねばなりませぬ。と說くのであります。卽ち朱子の考では忠孝の理は吾が心に具つてをるも學ばずしては其の理を承知することは出來ぬから親に事へ君に事ふる上に於て吾が心に存する忠孝の理を究め明にするを要すとの意でありまして決して忠孝の理が君父の身に在りとの意ではないのであります。然るに王陽明は孝之理其果在於吾之心邪。抑在於親之身邪。假而果在於親之身。則親沒之後吾心遂無孝之理歟。と論じ朱子の說は孝の理を親の身に在りとせるもので告子義外の說と同樣であると解し之を非難しましたのは未だ朱子の本意に達せざるものといはねばなりませぬ。更に格物致知に關する朱王二子の見解を比較して其の何れが優れるかを一言しますと朱子の格物致知說は獨り德性の知を窮むるのみでなく自然界の知をも兼ね窮めんとするのでありまして眞に天地萬物の理を包括して餘す所なく其の意義廣汎であります。之を現代の學問上より見ましても其の說には精神科學の外に自然科學をも包含せるのでありまして格物致知の解說としては完全せるものと信じます。然も身心修養の上より見ますと其の學問の範圍廣汎なるだけ知的探究に偏して心的體驗を忽にする弊に陷り易き所なしとはいへませぬ。一方王陽明の格物致知說は致知の知を良知と訓

じ獨り德性の知のみに限り心の不正を正して心の良知を事事物物の上に致すべしと解し偏に良知を致すことを尤も正しき人生の行路のやうに主張してをります。是は王陽明其の人の如き資質聰明の人に在つては首肯することは出來ますが之を其の儘一般の人に適用することは出來ませぬ。何とならば良知の作用は其の人の性質の高下、修養の厚薄、經驗の淺深、年齡の多少等によつて一樣ではありませぬ。從つて自ら善なり正義なりと信じて行つた事が實は善ならず正義ならず不善不義となつて現はることがありまして偏に所謂良知によつて其の作用に任ずることが場合によつては啻に個人のみならず社會又は國家にさへ非常な惡結果を齎すことが往々ないではありませぬ。是は格物致知の功によつて道理を明にせず道理に暗い所から起るのであります。でありますから王陽明の致良知の主張は所謂易簡直截で要領を得たるやうでありますが知界狹隘であつて心的修養に偏して知的探究を忽にする弊に陷り易いのであります。修養上より見て德性の知を致すことの大切であることはいふまでもない所でありますが自然界の知を致すことも亦同時に重要でありまして人は自然界の知を有せず只德性の知のみを以てしては知界狹隘で其の見る所褊狹固陋を免れませぬ。從つて物事を觀察し判斷し處理する上に於て其の正當を得ざるものあるべきは勢の免れざる所であります。德性の知と自然界の知と二者兼ね備はりて初めて觀察、判斷、處理の完全を期することが出來ます。德性の知と自然界の知とを修得することは兎角繁瑣に亙つて其の功を全うし難く流れて支離に陷り易きより朱學に對する非難も自

ら起るのでありますが此の點は省察努力の功によつて其の弊に陷らないやうにすることが出來ます。然し王陽明の主張に至りましては初から全然自然界の知を除外してをり從つて初から褊狹固陋の弊があるのでありまして省察努力の功によつて其の弊を救ふことは出來ませぬ。してみると王陽明の格物致知說は朱子の說に對し此の點に於て一籌を輸するものといはねばなりませぬ。

第二の心と理との關係につきましては朱子は虛靈なる氣中に性の理を全具して萬事に應ずる主宰的地位を占むる者を心としてをります。卽ち理の氣中に寓せるものを心としてをります。言ひ換へますと理と氣と合して心を成すとし心と理とを區別して見てをりますが王陽明は之を執らず心は卽ち理なりとし兩者を同一の者として見てをります。此の王陽明の心卽理說は已に陸象山の提唱したものでありまして王陽明は之を承け繼いだまでであります。象山は心卽理說を說明して人皆有是心。心皆具是理。心卽理也。と申してをります。然し象山の如く人皆是心あり心皆是理を具するを以て直に心卽理と斷ずるはいかがでせうか。象山自身も人皆是心ありて是理を具すといへる以上理が心の中に具有せらるるを示せるもので是れ已に心と理とを區別して見てをるのではありますまいか。心の中に具有せらるるものは理に相違なきも心は理を包容せるもので二者全く同一物とはいはれませぬ。之を更に象山自身の言に因つて見ても此理塞宇宙といひ道塞宇宙といへる如く宇宙は此の理の充塞する所で宇宙を離れて理は存在せざるも宇宙卽理にあらず。之と同樣に心を離れて理は存在せざるも心は理を包容

せるもので心卽理ではありませぬ。殊に象山の宗とする所の孟子も君子所性。仁義禮智根於心。といひ、又理義之悅我心。猶芻豢之悅吾口。といつて明に心と理とを區別して見てをります。之によつても象山の見解の誤れるを知ることが出來ます。王陽明は其の心卽理說を說明して心卽理也。天下又有心外之事心外之理乎。といつてをりますが一方では心を說きて虛靈不昧。衆理具而萬事出。といつてをるに徵しますと陽明も矢張理が心の中に具つてをるを認めたもので其の言ふ所が徹底してをりませぬ。此の點は朱子の所說の明快妥當なるに及びませぬ。

第三の點に於きましては朱子は爲學の功夫たる格致の上に學問の主力を置きましたが王陽明は爲學の目的たる誠意の上に之を置きました。此の點に關しては朱子對陸象山の關係と同じでありますから前に朱陸の關係につき申し述べた所のものを其のまゝ此に充てはめることが出來ますから重ねて此には申しませぬ。

第四の知行兩者の關係につきましては已に論語に博學於文。約之以禮。亦可以弗畔矣夫。とありまして孔子已に知先行後を說かれ、大學にも知止而后有定。定而后能靜。靜而后能安。安而后能慮。慮而后能得。物有本末。事有終始。知所先後則近道矣。とあり、又欲修其身者先正其心。欲正其心者先誠其意。欲誠其意者先致其知。致知在格物。とあつて同じく知先行後を說き、中庸にも博學之。審問之。愼思之。明辨之。篤行之。とあり。又不明乎善不誠於其身。とありまして亦同じく知先行後を說

き爲學の正面より見れば知は先にして行は後なることは明であります。但仔細に之を考察しますと知と行とは常に相關聯せるもので總てを知り盡くして行ふのではありませぬ。知りつゝ之を行ひ終に知り了り行ひ了るので着手の順序よりいへば必然知行に先後の別はありますが已に着手して後は知行は並進することとなり終に知る所は行ふ所と合一するのであります。故に着眼點を異にするに由つて知先行後說ともなり、知行並進說ともなり、又知行合一說ともなるのであります。　之が爲め宋明間の主要なる學者も各其の見る所によつて說を立て自ら此の三派に分れました。知行の關係を爲學の正面より見て知先行後說を執れるは程伊川及び朱子でありまして其の正系に屬する學者は皆此の說を宗とし陸象山さへも此の說を執つてをります。尤も程伊川は知先行後說を爲すと同時に其の極致としては知行合一論を爲してをり又朱子は知先行後說を執ると同時に知行並進論をも爲してをります。知行合一說は王陽明の極力主張せる所でありまして其の要旨は知は行の始にして行は知の終なりとの一語に盡きてをります。卽ち知るは行はんが爲なれば知は行の始にて行ひ了りて其の知全きを得べきが故に行は知の終なり。斯くて知行は合一すと說くのであります。王陽明の此の知行合一說は將來大に勢を得て知先行後說と對立することとなりました。此の知先行後と知行合一との兩箇の主張には各道理がありまして並立するのでありますが之を一般學者の立場より之を見、又爲學の順序より之を見ますと知は先にして行は後なることは前揭の論語、中庸及び大學に徵して明なる所でありまして朱子の說は

由つて本づく所がありまして自ら是れ正論とすべきであります。王陽明の說の有力なる主張たるは之を認めますが其は陽明獨自の說たるを免れませぬ。

四

朱陸王三子の異同は大要以上の通りであります。之によつて見ますと朱子對陸王二子の異同を見ることが出來るのみならず陸象山對王陽明の異同も明となつた譯であります。卽ち陸王二子は其の根本的主張に於ては同一でありますが格物致知と知行の關係とに於て其の見解を異にしてをることが分ります。此の兩者の解釋については陸象山は程朱と其の見る所を同じくしてゐますが王陽明は之を執らずして前陳の如き見方をしてをります。王學が陸學に比して一層禪學に近似するに至りましたのは職として陽明の格物致知と知行とに關する見解が然らしめたのであるといつてよいのであります。

之を要するに朱子學と陸王學とは近世支那儒敎界を縱斷して相對立し兩々相執つて下らなかつたのでありますが中に就き何としても近世儒敎思想界の正統としては朱子學を推さぬ譯にはゆきませぬ。朱子學は北宋時代に勃興しました諸種の儒敎思想を綜合大成して當時の正統の學問となり更に元明を通して盛んに行はれたものでありますが陸學は王陽明によつて承繼せらるるまでには時に斷續があり從つて近世儒敎思想界に於ける勢力影響の上より見ますと陸王の學は到底朱子學の大なるに及びませぬ。只陸王學の出現によつて近世儒敎界に一種淸新なる氣味を加へ思想界の活躍を將來すると同時に

後世に大なる影響を及ぼし朱學と相俟つて世道人心の上に大に寄與する所ありました事は支那思想史上特に刮目して看取すべき所です。そして此の二大思潮がやがて我が國にも渡來しそれ〴〵の思想力精神力を以て我國の思想精神界に甚大なる影響を及ぼし王政維新の實現にも少からず貢獻する所のありました事は皆樣御承知の通りであります。

終りに一言附け加へますが我國が維新以後昭和の今日に至るまでに國運の甚大なる發展を致し國際間に推しも推されもせぬ地位を占むるに至りましたるは御稜威の然らしむる所でありますが一には儒教の精神によりて培はれました日本精神の活躍も亦與つて力あることと存じます。然るに支那はいかがでありますか。斯く大切なる教あるにも拘らず之を棄てて顧みず、其の數千年に亙れる世界最古の國の一としての誇りを抛ち徒に歐米に依存せんことを是れ力め、世界の大勢に暗く、東洋の安定勢力である我國に對し善隣の誼を棄てどこまでも我に反抗せんと企て、遂に今日の事變を招來し不測の禍に陷るに至りましたのは誠に惡むべきであると同時に又誠に憐むべきであると思ひます。支那が現在の如くなりましたのは全く孔子の教に背き孔子の教を棄てて顧みざる報と存じます。孔子の教が萬古に亙つて生命ありそして尊重すべき大切な教であることは、之によつても明に證されてをることと存じます。（昭和十二年十月記念講演）